

## 【「水の問題」と向き合う】

沖縄県 粟国中学校 一年 与儀よぎ 七星ななせ

「この子たちは島のことを全然、知らないから・・・。もつと学んでいくべきよ。」

なんとなく聞き流していた母のつぶやき。

島に残っている、大きな石で作られた水がめの「トゥージ」について調べていくうちに「なるほど・・・。」母が言っていることが、納得できるようになりました。島では雨水を溜めて利用していた生活から、井戸水を汲み上げて使うようになり、現在は、水道水を使用する便利な暮らしになっています。

水を溜めるための容器「トゥージ」は石で作られています。昔はどの家庭にも一つ以上はトゥージがありました。島の西海岸にもあるやわらかい凝灰石を採取し、大きな茶碗のようにくり抜いて作ったトゥージは、私たちの小さな粟国島で見ることができない貴重なものです。島の水事情の移り変わりは、人々が生きるために努力してきた歴史を語ってくれています。トゥージを作り運搬する作業には多くの人手が必要でした。台風が来ても、びくともしない強固な石の容器は、約一トンもあり、時には百人ぐらいを動員することもあったらしいです。たくさんの人々が協力し助け合わなければトゥージを作ることではできませんでした。蛇口をひねれば安全な水が出てくる現在の生活を当たり前のように思っではいけないことが分かります。水は限りある資源なのです。

島で暮らし続けている人にインタビューしました。

「水道が通っていない頃は、飲み水はどうしていましたか。」

「その頃は各家庭にタンクがあつて飲み水などは、そこからとっていたよ。」

「大きいなべでお湯を沸かし、お風呂にしていたさ。」

「ため池や井戸などの水は、洗濯、牛や馬などを飼うために使っていた。」

「各部落に井戸があり、そこへ水を汲みに毎日行っていた。」

学校から家に帰ると水汲みの仕事が必要あり、それをやらないと生活でき

なかつたので、毎日大変だったと話していたその人は、やっと水道が仕えるようになった時（これで水を汲みに行かなくてもいい。）と思うと、とても嬉しかったそうです。

海水から淡水（真水）をつくる施設が整備され、島では安定した水道水の供給ができるようになってきている現在、海からの恵みによって、干ばつなどの天気に左右されることもなく、水資源を確保できるようになっています。

今年6月に日本でG20サミットが開催されました。主要なテーマの一つは海洋プラスチックのごみの対策でした。島の海岸にも各国からプラスチックごみは漂着しています。海は世界が一つであることを教えているのです。海水を汚さない取り組みは、安心して水が飲める生活と直結しています。

水の問題は、世界においてもあります。住んでいる国や地域環境において、飲める水が確保できない国や地域がまだまだあります。水を汲みに行くために学校へ行けずに、水を汲むだけの生活をしている子供たち。汚れた水を飲むことで病気になったり、命の危険にさらされる場合もあります。おびえながらも汚れた水を飲まなければ生きていけない生活をしている人々がいます。

私たちの島の先人たちは、一人ではできないことも、助け合いながら地域の課題でもある「水の問題」を乗り越えてきました。現在の水資源環境はあたり前ではなく、多くの先人たちの努力の歴史があつたからです。すべての人が安定した水を飲める日々がくるのは、地球上に住んでいる私たち一人ひとりの努力次第だと思います。私もできることからやっていきたくと思います。環境を汚さない、水を大切に思う等、できることはいくつでも見つけられるのだから・・・。